高倉山と豊受大神（台与）の東遷

白崎　勝

東遷を決断した豊受大神

豊受大神は外宮に祀られている神です。その荒御魂は外宮の多賀宮（たかのみや）にあります。境内には高倉山があります。

西暦八〇四年、雄略天皇の夢のお告げにより、丹波から迎えられました。内宮の天照大御神に朝夕の御饌（みけ）を献じるためです。

天照大御神は高天原の主で邪馬台国の女王・卑弥呼と考えています。卑弥呼の後を継いだ十三歳の宗女・台与が豊受大神です。国づくりを進めてきた天照大御神の意志を継いで、神武兄弟と共に九州から奈良への遷都を決断しました。

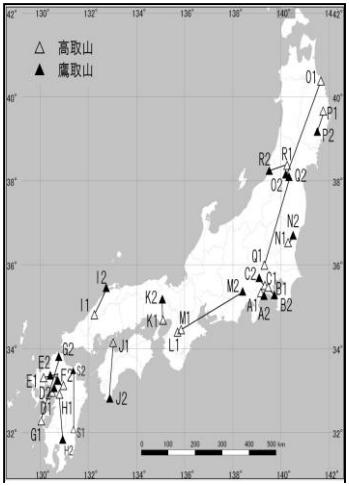
神武東征のことは記紀に詳しいのですが、豊受大神のことは全く記されていません。ところが、高倉山を各地に残し、東遷の足跡を記録していたことが見えてきました。

神武東征の概要

古事記と日本書紀の二書が、ほとんど同じ神武東征を記録しているにかかわらず、今もって、異なる建国の過程を模索している現代です。記紀の記述を誤りとする先入観念で、遺跡や遺物・伝承を見るためでしょう。東征を立証する立場で見てみると、古代人の英知で遺した痕跡が全国に溢れていることに気づきます。

その一つ、井上赳夫は東征経路に沿って、高田などの「タカ」型地名が残されていると発表しました。

この考えを引き継ぎ、私は、これまで、全国の「タカ」型の山名、高取山・鷹取山は東征のベクトルだったことを報告しています。全国の分布を地図1に再掲します。



地図１　全国のたかとり山

たかとりの「たか」の一字を変えて東征の進攻方向としています。奈良を境に西は神武東征、東は日本武尊東征の足跡です。

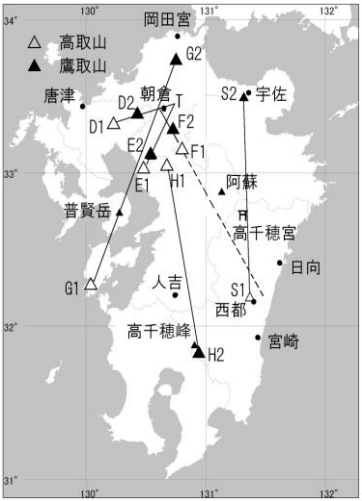
二つの東征が同じ「たかとり山」を用いているので、一連の建国の事業と認識していたことが分かります。

神武隊は本隊と合流した

九州の「たかとり山」の分布(地図2)を見ると、東征以前の状

況が見えてきます。６対のベクトルがあり、内３対で朝倉市に三角域Ｔを形成しています。ベクトルＦは反対に延びる点線のように、日向に延びていて、神武兄弟が高千穂宮で東征を相談した後、Ｔに向かった足跡と考えます。倭国との連合のためでしょう。神武の先祖、邇邇藝命は北九州の高天原から高千穂に天降りしており、倭国との連合は当然の行動です。ベクトルが短いのは、多用の混乱を避けるためか、日向の投馬国と区別し、倭国の領域を意識したものでしょう。

ベクトルＤとＥは筑紫平野の人々が、Ｔに向かい集合したことを記録しています。直方市の鷹取山に延びるベクトルＧは、天草や島原の人々がＴ付近で合流した後、岡田宮方向に進んだ本隊があったことを示しています。



地図２　九州のたかとり山

ベクトルＨは、東征を決めた神武が筑肥山地を越え、生まれ里の高千穂峰山麓に一旦戻った事を示しています。東征の準備のためでしょう。ベクトルＳは、西都原の高取山から宇佐神宮の南西にある鷹取山に延びていて、記紀が記す東征最初の行程です。西都原を出発したことが分かります。

古事記は東征出発について、「すなはち日向より發たして筑紫に幸行でましき。故、豊国の宇沙に到りましし時、・・・」と記していて、順次式に読めばまず筑紫に行幸したことになります。迂回先の「竺紫の岡田宮」は、筑紫と異なる「竺紫」を使用しているので岡田宮のことではありません。この筑紫をＴの高天原に比定できます。

倭のクニグニは東征に参加した

魏志倭人伝に登場する倭のクニグニが、東征に参加したことが記録されていました。図３は北九州の「たかとり山」分布に「○尾山」を追加した図です。「○尾山」の中でも「高お山」は特別に意識された山で全国に56あります。

魏志に記す一支国の壱岐と末盧国比定地の唐津に「高尾山」が見つかります。伊都国比定地の糸島市は、同じ「タカ」型地名の「高祖山」があって、「世王在り」「一大率」がいたと記すように、特別な国であることが分かります。奴国・不弥国付近には大宰府市の「高雄山」があります。ここが「高雄山」となっているのは、経路の区切りのためです。これらのクニグニも大宰府付近で、本隊に合流したことが読み取れます。近くの米ノ山峠に笹尾山・竹

ノ尾山を残して、合流後この峠を越えたことまで記録しています。

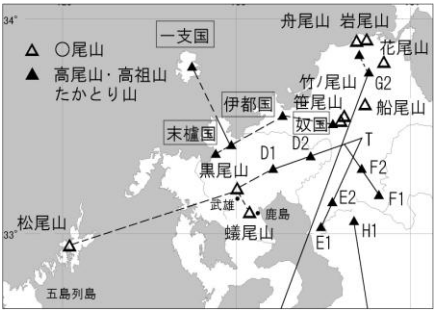
その余のクニの参加は五島、武雄、鹿島に「○尾山」で記録しています。「高尾山」でないのは、旁国としての区別でしょう。

若松半島の岩尾山、舟尾山は遠賀川下流を指し示します。山名の頭をとった岩舟は上流にある船尾山とあいまって、東征の為の造船を記録しています。船尾山の木の川出し地と思われる、遠賀川支流を訪ねると位登古墳がありました。伊都国の人が采配したのでしょう。

第一層の「たかとり山」が進攻方向を示し、二層の「高尾山」が一層を補助し、三層の「○尾山」が事跡などを記録しています。

真実を知る人のみが、できた内容です。良く考えられた山名や配置は、用意周到な東征だったことが見えてきます。

以上の事柄は、魏志が記す250年頃の後、神武東征が行われたことも分かります。三角域Tは邪馬台国の都で、卑弥呼が住んだ所と考えます。



地図３　北九州のたかとり山と○

全国の高で始まる主な山

「タカ」型の山名を多い順に表にしてみました。この中の高山と高倉山が三角域Tの高天原で見つかります。さらに高山と高倉山を結んだ線上には、高城山の元となったと思われる「城」の地名や高塚山の元となったと思われる「拝塚」の地名も見つかります。

また天照大御神を祀る麻底良山を指し挟んでいます。

山　名	数
高山	82
高倉山	56
高尾山	56
高森山	45
高塚山	31
高城山	25
高畑山	19
高取山	17

地図４　朝倉の高倉山

九州の高倉山

そこで、九州の高倉山を調べると、朝倉の高倉山の対と、薩摩半島の対の四山が見つかりました。薩摩半島の対を結び北に伸ばすと麻底良山に結ばれているように見えます。熊本の○尾山三山を経ており偶然ではなさそうです。

朝倉の対を拡大すると、これも麻底良山を指し挟んでいます。さらに中間には地図６のように高塚山も指し挟んでいて、この高塚山が英彦山の麓の高塚山と対で、猿田彦が天孫降臨を待ち受けた日田・若宮神社の八街を挟み残したように見えます。

こうしてみると、薩摩半島の対も、天孫降臨した邇邇藝命の薩摩でのできごとを指し残したと考えられます。

九州の高塚山も調べ結んでみました。（地図７）。天孫降臨の経路とよく似ていて、朝倉を出発して高千穂町を経由し西都原に向かったように見えます。さらに、薩摩半島から屋久島まで伸びています。

地図５　九州の高倉山

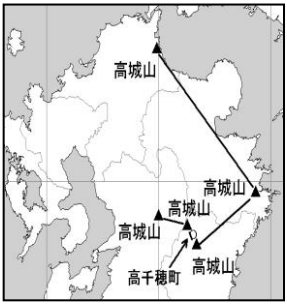
地図６　日田の高倉山

豊受大神は南九州の邇邇藝命や山幸彦・猿田彦などの足跡を巡り、東征の報告とその加護を祈ったと思います。そして女性の豊受大神をサポートする隊もあったのでしょう。

神武が発港した肝属川河口や耳々津港、あるいは岡田宮近くにある権現山は神武を顕彰した足跡と考えます。長崎半島の権現山は猿田彦を顕彰しているのでしょう。

さらには、高倉山の高を変更した○倉山が足跡を補佐しているように見えます。全国に○倉山は４００を超える数があって、○尾山２３３を超える最多の同種の山です。

地図７　九州の高塚山

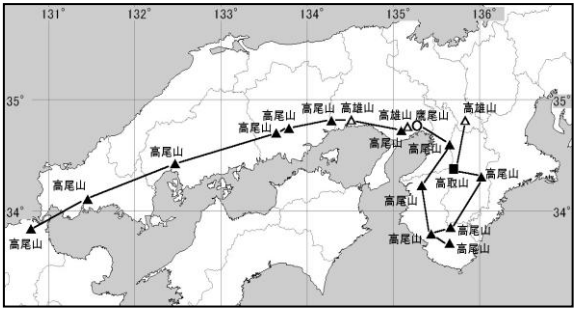


地図８　九州の高城山

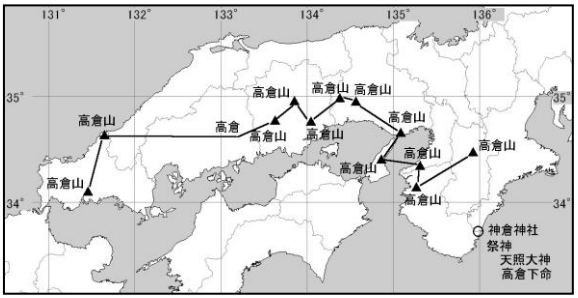
高城山も地図にプロットし、結ぶと地図８のようになり、熊本からやはり高千穂町を経て、九州の東岸を北上しています。別の隊があって日向を出発した神武隊に合流したように見えます。

東征経路の高倉山

地図９は瀬戸内海を進んだ神武東征の経路に残された高尾山の足跡です。山陽道を進み、孔舎衛の坂で敗れた後、熊野に迂回



地図９　東征経路の高尾山



地図 10　東征経路の高倉山

したことや東征最後の到達地点が宇治であることまで記録しています。

高倉山の足跡（地図 10）は山口市に始まり岡山付近に多くの高倉山を残しています。神戸からは淡路島に迂回しています。戦いがあった河内を避けたと考えます。その後、泉南付近に上陸し最後は宇陀で終わっています。

淡路島の伊弉諾神宮の所在地は淡路市多賀であることから、創祀が豊受大神であることを推測できます。淡路島の高倉山と泉南の高倉山を結んだ線上に、五瀬命が亡くなった男神社が、海南市の高倉山を結んだ線上には五瀬命を葬った竈山が見つかります。豊受大神が訪ねて祭祀したのでしょう。

地図 11　五瀬命と高倉

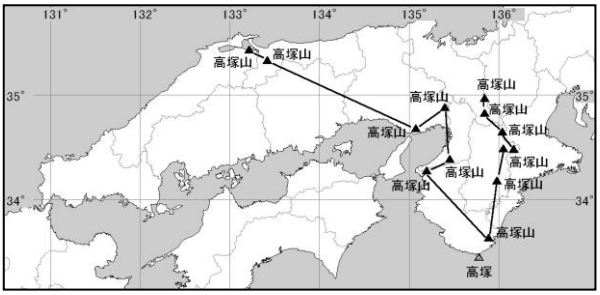
神武の軍が熊野で萎えていると聞き、豊受大神は天照大御神と高木神の名のもとに高倉下を遣わし、神剣・布都御魂（ふつのみたま）を届けています。

日本書記は、宇陀の高倉山で神武が国見したと記します。この高倉山を訪ねると、見晴らしが悪く国見できる山ではありませんでした。山の中腹には稲荷神社、山頂には高倉下が祀られていることから、高倉下の案内のもと豊受大神はここで神武と再会し、

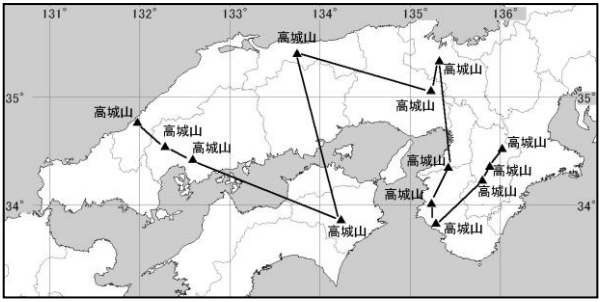
東征後の国づくりを話し合い、神武に託したと考えます。

東征経路の高塚山・高城山

地図11・12に東征経路の高塚山と高城山の配置を示します。いくつもの隊があったことが分かります。そして皆、河内から南に迂回し、宇陀から宇治に進んだことが分かります。



地図12　東征経路の高塚山



地図13　　東征経路の高城山

その後の豊受大神

東征後の豊受大神については『摂津国風土記』逸文に手がかりがありました。

「又曰く、昔、豊宇可売の神、常に稲椋(倉)山に居まして、山を以ちて膳厨の處と為したまひき。後、事の故ありて、己むこと得ずて、遂に丹波国の比遅の麻奈韋に還りましき。」

今、稲倉山は不明です。宇陀から宇治を目指した後、摂津国に居たのでしょう。しかし、神武が即位したことで、この近くにいては迷惑になると考えたのでしょう。丹波に向かいました。

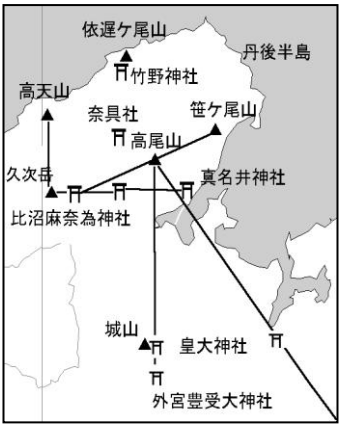
比遅の麻奈韋（ひぢのまない）

丹波には内宮と外宮の元伊勢がいくつもあります。表は候補神社です。(地図14)。「まない」と称する神社は比沼麻奈為神社と籠神社の摂社・真名井神社です。比沼麻奈為神社を訪ねると久次岳の麓にあり、その静謐な佇まいは豊受大神の控えめな人柄そのものでした。久次岳は東征隊が名づけたと思われる高天山の南にあって、山頂には大饗石(おおみあえいし)と名づく長方形のテーブル石があります。高天山に向かい天照大御神

元伊勢	候補神社名
比治真奈井 (比遅の麻奈韋)	比沼麻奈為神社
	奈具神社
	真名井神社 (籠神社摂社)
	豊受大神社(外宮)

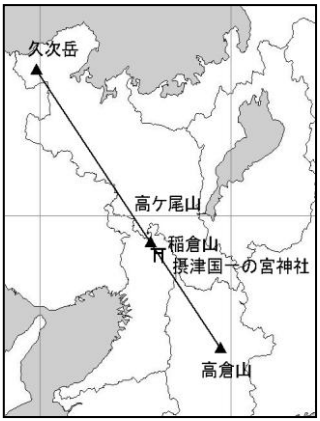
に御饌を献じていたと思います。

地図14のように比沼麻奈為神社は笹ケ尾山と高尾山が指し示す場所にあるのも、神武東征を追って、高天原を出た豊受大神らしい選択と考えます。



地図14　丹波の元伊勢

摂津国風土記に記す稲倉山を調べていると、高槻市の摂津国一宮神社に豊受大神が祀られていて、神社の参道が後方にある高ケ尾山に向いていることを見つけました。その参道の方角を延長すると高ケ尾山を経て丹波の久次岳に、南に延長すると宇陀の高倉山につながっていました。豊受大神が宇陀から丹波に向かう途中、摂津国に留まった記録方法として納得できます。



地図15　稲倉山

奈具社（なぐのやしろ）

元伊勢の奈具社について、丹波国風土記は記します。「・・・比治山の頂に井あり、その名を間奈井と云う。・・・この井に天女八人降り来て、水浴みき。時に老夫婦あり。この老達、この井に至りて、ひそかに天女一人の衣裳を取りかくしき。やがて衣裳ある者は皆天に飛び上りき。但、衣裳なき女娘一人留まりて、すなわち身は水に隠して、一人はぢ居りき。ここに、老夫、天女にいひけらく、「吾は児なし。請ふらくは、天女娘、汝、児となりませ」といひき。・・・すなわち相住むこと十年余りなりき。

ここに、天女、善く酒を嚙みつくりき。その家豊かに、・・・かれ、すなわち比治の里と云ふ。

後、老夫婦等、天女にいひけらく、「汝は吾が児にあらず。しばらく借に住めるのみ。早く出で行きね。」といひき。ここに天女、涙を流して、「久しく人の世に沈みて天に還ることを得ず。いかにせむ。」といひて歎き、天を仰ぎて歌ひしく、

天の原　ふり放け見れば、
　　霞立ち　家路まどひて　行方知らずも。

ついに退き去きて奈具の村に至り、すなわち村人達にいひけらく、「ここにして、我が心なぐしく成りぬ。」といひて、すなはち此の村に留まり居りき。こは、いはゆる竹野の郡の奈具の社に座す豐宇賀能賣命なり。」

そこで、私はなぜこの奈具社で心が、なぐんだかを知りた

写真１　谷向こうに見える高尾山

くて、訪ねてみました。追い出された比治の里から今の峰山町を通り、10km ほど東北に進んだ、弥栄町の東のやや開けた小さな扇状地にありました。北側の山の麓にある小さな社です。社に詣でても何も発見はありませんでした。

社から駐車場に降りてきて何気なく見た遠くの風景に、豊受大神の心の風景も見えたのです。ただ青々と山々が連なる風景です。その連なる山々が途切れたところがあり、その谷間の向こうに高尾山が見えたのです。丹後半島の高尾山は半島の中ほどにあり、平地から良く確認することができません。ここが、奇跡的によく見える場所だったのです。豊受大神は、ここにも東征の足跡を見つけて心がなぐんだのでしょう。

終焉の地

豊受大神は丹後半島や舞鶴を漂泊し、その後、大江山の近くで、天照大御神に御饌を献じていたのでしょう。内宮と外宮があります。東遷の最中の吉備にも内宮は残ります。いずれも東征の最中に名づけられた高尾山や○尾山が指し示す場所にあります。丹波の内宮と外宮は地図 14 のように丹後半島の高尾山の眞南に位置しています。そのような場所を尊い場所と考えたのでしょう。

崇神天皇時代に天照大御神の新しい鎮座地を求める作業が始まりました。託された皇女・豊鋤入姫命は、まず奈良から丹波に来ています。この時は鎮座地の探索でなく、どのように奉じたら良いか、その心を探す旅でした。それは豊受大神の心を探す旅でもありました。

この時、すでに豊受大神は無く、その陵さえも見つかりません。

写真２は丹後町の依遅ケ尾山です。この依遅ケ尾山の中央手前に大きな神明山古墳が残ります。前方後円墳であることから、この時、豊受大神の陵を築造したのではないかと考えています。

写真２　依遅ケ尾山と神明山古墳